

黄金のパゴダに軍事政権が落すくらい影

ビルマ「観光年」の裏側で

「黄金に輝くパゴダ」「壮大な遺跡群」などが呼び物のビルマ観光。この一八日(九六年)から「ミャンマー観光年」が正式に始まり、日本からも多数の旅行者が予想される。「観光年」の成功は、ビルマ国民に利益をもたらすのだろうか。経済発展と開放政策が進むビルマの、観光ルートからはずれた現実の姿を報告する。

激しい雨の中、トラックはタイヤをスリップさせながら坂を登り続ける。行き先は、首都ラングーンから北東へ約一八〇キロメートル、チャイトー山頂にあるチャイティーヨパゴダである。黄金に輝くチャイティーヨパゴダは、首都にあるシエダゴンパゴダ、マンダレーのマハムニパゴダと並んで、ビルマで最も神聖とされる仏教徒の巡礼地の一つである。

チャイトー山は、自治権獲得のため武装闘争を続けていたカレン族・

モン族の旧支配地域のすぐそばにある。激しい内戦が続いていた数年前までは、ここを訪れようとする外国人は、首都で通行許可証を手に入れ、ビルマ軍兵士の同行を必要としていた。昨年八月、ビルマ軍事政権(国家法秩序回復評議会「S L O R C」とモン族との和平合意が成立し、現在カレン族とも和平合意に向けての準備が進み始めている。その後、外国からの観光客も乾季に限りチャイティーヨパゴダを自由に訪れることができるようになった。

「チャイティーヨパゴダを拝めるかどうかは運の問題だ。雨季の激しい雨で道路は通行止めになっている。運良く工事用のトラックに乗ってきて、どこまで行けるか分からない。それに山頂は濃い霧のためすぐ目の前が見えないくらいだ」。今年六月、チャイトー山に入ろうとする筆者に地元の人はいこう語った。

夜明け前の雨に濡れながら

工事関係者と交渉し、二〇〇K(チ

ヤット)払うことでチャイトー山頂に向かうトラックに乗せてもらうことにした。ビルマの為替レートは、公式で一米ドル〃約六Kであるが、市中のブラックマーケットでは約一六〇K以上のレートになる。外貨を渴望するS L O R Cは、当然、一般の観光客に対して、公式レートでの支払いを求める。

工事関係者と村人を満載したトラックは、雨でぬかるんだ急な坂道を、エンジンをうならせながら上っていく。タイヤは泥で滑り、何度となくトラックはひっくりそうになる。一時間ぐらいい走った頃、三〇人くらいの村人が山道を補修している。雨の中ずぶ濡れになりながらコンクリートブロックを敷いている。まだ幼い子供も多く見かける。

取材への警戒心が強い首都ラングーンでは、工事にかり出された子供の写真を撮っていると、必ずといっていいほど現場監督にじやまをされた。だが、ここではそんなことはなかった。それどころか現場監督らしき男は、「一日働いて、子供なら五〇K、大人なら八〇Kの稼ぎだよ」

と教えてくれた。しかし町の食堂では、焼きそば、焼きめしが三〇〜五〇Kくらいだから、彼らの稼ぎは一日の食事代にしかない。

夜明けのバゴダ（仏塔）を写真に撮ろうと思い、朝五時半に起きて土砂降りの中バゴダへ向かう。濃い霧の中、雨でびしょ濡れになった人たちが参道修理のため煉瓦運びをしている。ビルマの人は年齢の割に若く見えるが、どうみても一〇歳前後の子供たちも煉瓦を運んでいる。

煉瓦の重みで顔をゆがませている少年。寒さか、あるいは重さのためか腕をぶるぶると震わせている女の子。みんな夜明け前の暗がりの中、大粒の雨に打たれながら仕事をしている。

ビルマでは、一月一八日から正式に「ミャンマー観光年」（以下観光年）が始まった。これは、一九九〇年の総選挙の結果を無視し、軍事力を背景に政権に居座り続けるSLORCが、政権維持の正当性と外貨獲得を目的として打ち出した政策である。光り輝くバゴダや世界三大仏教遺跡の一つであるバガン遺跡、これまで長らく制限されていた地域へ

の旅行は観光客にとって大きな魅力である。

### 期待は日本からの観光客

国家予算の三割以上を軍勢力維持に費やしているSLORCは、六億ドルの外貨準備があるといいながら、この九月には約三千万ドルの原油代金を日本の商社に支払うことができなかった。医療や教育の予算は年々削られている。経済的に苦しいSLORCが、手っ取り早い外貨獲得の手段として考えたのが、「観光年」ではなかったか。SLORCの観光大臣のチョーバー將軍は、外国の報道機関のインタビュに、「日本からの観光客を一番多く期待している。今年度の観光収入は昨年の八〇〇万ドルから一億ドルにまで伸びるだろう」と答えている。

一方、アウンサンスーチー氏を中心とする民主化勢力は、この「観光年」に反対の声をあげている。SLORCの進める「観光政策」は、一般国民に経済的利益をもたらさない外貨獲得政策であり、何よりも、

（SLORCの発行する観光ビザで入国することは）不法な現政権を認めることにつながる、と説明する。

建設現場での強制労働、先住民族に対する人権侵害、SLORCと民主化勢力との対立。ビルマ国内からは緊張が高まっているニユースが発信されている。ところが、筆者が現地であった観光客は、どの人もビルマ人の優しさや自然の美しさばかりを強調していた。ある程度行動が自由な個人旅行者のひとりには、「マスコミの報道するビルマ像民主化勢力側に偏りすぎている」とも言い切った。

外国人によるSLORCへの支持とビルマに関するニユースへの不信がこようやく個人レベルで培われていく。民主化勢力が怖れるのはこの点である。

彼らには、観光ルートからはずれたところにある現実は見えるはずがない。さわやかな風の吹く季節にビルマを旅行する観光客に、雨の中をずぶ濡れで働いていた子供たちの姿を想像することは不可能だ。

「開放政策を取り入れ、外国人を国内に入れることによってその国の

現実を変えていこう」という考えは、ビルマには当てはまらないだろう。決まった観光ルートだけを通って、お金を落としていく観光客をS L O R Cは望み、そういう訪問者だけを受け入れるのだから。

「問答無用に観光客を拒絶しているのではない。ビルマの本当の姿をしつかりと見てくれる人なら歓迎する」。ビルマの民主化指導者のいう言葉は、はたして日本からの観光客に届くだろうか。

### ^写真キャプション^

チャイトー山頂の黄金の岩の上に高さ四五メートルのチャイテイーヨバゴダがそびえ建つ。大晦日には一万人近い信者が訪れるが、道路が通行止めになる雨季の期間、訪問者の姿は殆ど見られない。

首都ランゲーン市内のスラム。表通りには新しいホテルやオフィスの建設が進む。その一方、裏通りには、電気・水道もない家々が建ち並ぶ。雨が降れば汚水が路地に溢れる。

道路建設に従事する子供。約三〇名の子供たちが働いていた。

チャイトー山頂で、チャイテイーヨバゴダに通じる参道の修理用の煉瓦を運ぶ少年。たたきつけるような激しい雨の中、約三〇〇メートルの距離を往復し続ける。

ビルマ政府軍の迫害から逃れ、タイ・ビルマ国境の難民キャンプに到着したばかりの一家。タイ・ビルマ国境には少なくとも九万五〇〇〇人の難民が暮らす。難民キャンプを助ける国際的N G Oが食料の援助を続けている。

ポジション交代のために整列するビルマ軍兵士たち。一年半前まで、この場所は自治権闘争が続いているカレン民族同盟解放軍が支配していた。

上の兵士の交代が終わった直後、荷物を運ぶ

ポーターの姿が見られた。軍服を着ていないところから、軍の物資の運搬のために徴用された村人たちだと

思われる。

首都ランゲーンの目印というべきスーレーバゴダ。そのすぐ横に景観を台無しにする外国資本のオフィスビルが建設中。

精米工場で働く少女。ビルマの外貨獲得の筆頭はコメの輸出。輸出国でありながら、満足に自分たちの作ったコメを口にすることができない農民もいると報告されているようだ。

注意深く観察すると、ランゲーン中央駅や大都市の駅には、駅で寝起きし、物乞いをする子供たちの姿が見られる。外国人に近づこうとすると駅を警備する警察官に追い払われる。